
ぼくと夜食と爪楊枝と

和式便所（絶滅危惧?類）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくと夜食と爪楊枝と

【Nコード】

N8210T

【作者名】

和式便所（絶滅危惧？類）

【あらすじ】

pixivと重複投稿です。
減ってなんか食べる話です。

なんて事はない、少年が夜中に腹

ぼくと空腹

武士は食わねど高楊枝、という言葉がある。

どんなに空腹だろうと、他人に弱みは見せまいと、あたかもたらふく飯を食ったかのように楊枝を使う。武士とはそうあるべきなのだという意味の、彼らの誇りの詰まった高尚なお言葉である。

ということは、彼らのように楊枝を口に啜えればこの空腹も幾分かはましになるのではないかと、数分前に胃の中へと消えたたこ焼きを惜しみつつ、ソースの染みついた爪楊枝をしゃぶってそんな事を考えた。

「うん、惨めになってきた」

時刻は丁度、夜の十二時をまわったところ。某動画投稿サイトが一時的に罵詈雑言に埋まるであろう時刻だ。

それにしても昔の人はえらい。こんなに味気ない物をしゃぶって空腹を我慢するなんて、ぼくには不可能だ。実際、今しがたたこ焼きを八個たいらげたばかりだというのに、満足感は何も得られていない。がまんも利かなそうだ。

それでもこの時間から、お腹いっぱいにご飯をとるというのもいささか抵抗が残る。『あまり夜中にご飯を食べると、明日の朝食が食べられなくなるよ』というのは田舎のおばあちゃんの言葉だ。それはいやだ、朝食を美味しくいただかないと一日が始まった気がしない、そんなの人生の七割八分は損しているに決まっている。かといってこのままお腹をなかせておくのは余りに不憫だ、おもにぼくが。『食べたい時に食べるのが一番美味しいのよ』と言っていたのは誰だっけ。……、田舎のおばあちゃんだ……。

自室に置かれた一人がけのソファにふんぞり返り、ぼくはうんうんと唸る。なにか物思いにふけていれば、この空腹も忘れられるのではと考えただけけれど、逆効果だったみたいだ。公園を散歩していて、悪漢に襲われている女性を颯爽と助ける妄想とかもしてみ

たけれど、何故かはわからないがお礼にチーズバーガーを受け取ってしまった。この卑しん坊さんめ。

自分で物語を創ってしまうからいけないんだ、と今度は読みかけた文庫本に手を伸ばしてみる。しおりを挟んでおいた頁を開き、視線を這わせたはいいもの、お腹が気になつて文章が全く頭に入つてこない。あまつさえ、主人公とその妻の馴れ初めを語るシーンで、妻がそれはそれは美味そうにホテルのバイキングを堪能していたものだから、ぼくは堪らず本を閉じる。

だつて信じられないでしょ、一縷の望みをかけて手にした本がまさか期待を裏切るなんて。まして夫婦の馴れ初めだなんて、お腹いっぱいだよつて言わせたいのかな。残念、ぼくは今空腹の極みなのだ。因みに、しおりをはさみ忘れた事に気がついたのは、その直後だ。

「そつだ、身体を動かせば空腹も忘れられるし眠くもなるさ！」

弾けるようにソファから立ち上がり、猛然と腕立て伏せを始める。平均よりもやや小柄なぼくは、その軽い体重に比例して腕も細い。腕立て伏せなんて十五回も出来れば上等な方だ。その代わりと言つてはなんだけれど、腹筋はそれなりに出来る。百五十回を超えた辺りで尾てい骨が痛くなるから、いつもそこでやめてしまうけど。

「よつしゃ、これで二週間分の運動はしただろ！」

明日には筋肉もりもりだぜ！ と爽やかに汗を拭いたあたりで、盛大にお腹が鳴る。そりゃあそつだ、運動をすれば腹がへる。これ、世界の真理なり。

どつこいここで誘惑に負けてしまえば、今の運動が全て水泡に帰す。水泡と言えば、宮沢賢治の“やまなし”を思い出す。ぼくが小学校の頃は「クラムボン」は泡」と教わつたけれど、最近では「よくわからないもの」となっているそつだ。かへの兄弟が作つた言葉だから解釈の仕様がなくなるとか。ああ、かへの兄弟、なんと罪深き響きなのだろう、食べたい、食したい。

いかにいかに、取り乱した。ぼくはもう一度ソファに座り直す。

高校生になってから直ぐに始めたバイトの、初めての給料を叩いて買ったソファで、かなり気に入っている。傷物で値打ち品となっていたものの、それでも給料の半分は持つて行かれた。ぼくとしてはそれなりに有意義な買い物だったと思っている。黒の革張りなのだが、そういうえば革って煮れば食べられたよね。

……もうダメだ。何をしてても食べ物に結びついてしまう。今なら連想ゲームで負ける気がしない。連想ゲームってこんな遊びだったかは、甚だ疑問ではあるけれど。

じとりとした汗が不意に頬を流れた。体感的にはそこまで暑いとは感じ無かったけど、一度汗の事を意識してしまうと、思い出したかのようにそれは吹き出し始めた。先ほどの運動がいけなかったのかな。

汗ばんだ身体が気持ち悪くて、堪らずに窓を開けはなつ。外はじつとりとした春雨だった。風はなく、雨が吹き込む心配は無かった。開けた窓から入り込む空気で涼を取るが、当然その空気は湿気っていて、汗ばむ身体には少し冷たすぎた。身体から火照りが拭われたころを計って、窓を半分ほど閉める。汗がひくと、心地良い夜だった。

ついでにこのまま寝てしまおう、空腹の事なんて忘れてしまつて、とぼくはベッドに潜り込む。冷たい風を掛け布団でガードする、というこの感覚がぼくは大好きだ。思わず布団の中で身悶えをしてしまつ程に。

「うひゃー、いい気持ちだ」

灯りをおとす。ふわり、と部屋の中を暗闇が包みこむ。そこにはぼんやりと浮かび上がる、消えそこねた光の残滓を、ぼくはまぶたをきつく綴じてかき消す。眠気は微塵もなかった。早く寝ないと、と思うとまた余計に眠くなくなってしまう。“アレ”の事は考えないように、ぼくは羊の数を数えることにした。一匹、二匹、三匹、四つ、五つ……。

いつからだろう、と灯りをつけたベッドに腰掛け、ぼくはお腹を抱える。

いったい、ぼくはいつから、羊じゃなくて綿あめの事を数えていたのだろうか。しかも、それを美味しそうに頬張るのは同じクラスのよし子ちゃんと来たもんだ。冗談はよし子ちゃんってか。ぼくにも分けてくれ。

というかそもそも、この羊を数えるというおまじない自体、英語圏じゃないと通用しないおまじないだし。SleepとSheepって、今どきそんな寒いギャグ、ぼくは聞いたこと無いね。

ベッドから立ち上がり、ぼくは一直線に部屋の出入り口へと向かう。目的地はもちろん、きちんと美味しいキッチンだ。

ぼくと料理

市営団地の短い廊下を歩き、リビングへ入る。すぐとなりが父の部屋だけど、彼は一度寝たら地震がこようが火事になるうが、それこそ母が出ていこうが決して目を覚まさないので、特に気配は殺さない。

キッチンには別に特筆する程も無い、普通のキッチンだ。強いて言えば、男性が使用するにはガスコンロが少し低いかもしれない。なにせぼくに丁度いい高さなのだから。まあ、主に女性が使うことを想定して作られているのだから、自然とそうなるのか。

とりあえず冷蔵庫を開けてみる。直ぐに食べられる物があればいいな、と、これは……。

「おお、うまか明太子……じゃねえ。博多明太子じゃないか」

ご飯の親友、明太子先輩だ。一腹もあればご飯四杯は軽くいける自信がある。正直これと茶碗一杯の白米さえあれば文句は無いのだけど、あんなに苦悶した拳句にこれだけというのもいかんせん納得がいかない。どうせならもっと豪華にいくべきだ、いかなければならないのだ。

つつつ、と視線を動かしていくと、一番下の段にあの特徴的なビールを見つける。茶色と金色の縦縞、峻険な山々を背景に長閑な農場が描かれ、その少し上には商品名のロゴが胸をはっている。そう、紛れもなく、ソーセージである。

商品名の由来は、観るという意味の英語と、独語で食卓を意味するエッセンという言葉からなる造語なのだと、どこかで聞いた覚えがある。こんなどうでもいい事を覚えているなんて、ぼくの頭はどういう構造をしているのだろうか。カルベン・ビンソン回路ですら、覚えるのに一苦労したというのに。うん、カルビン・ベンソン回路だったっけ？ ま、いいか。

「パキッ、じゅわー。だめだ、辛抱たまらん」

迷うこと無くソーセージの袋を手取る。となると、もちろん白米はおにぎりにするべきだろう。コーラを飲んだらゲップが出てしまうくらい、それは当然のことなのだ。おにぎりとソーセージという組み合わせ、それはアムロとシヤアのように、切っても切れない関係なのだ。

そして、アムロとシヤアとくれば、もう一つ、モビルスーツが必要となるように、おにぎりとソーセージというと、もう一つ、加わらなければならないものがある。

「……玉子焼きだ」

そう、おにぎりとソーセージと来れば、そこに玉子焼きも加わるのが自然な形だ。味に関してこだわりは無いけど、この品目ならば箸休めとして甘めにするのも、またおつなものかもしれない。

ぼくは卵を二つ掴み、すこし悩んでからもうひとつ掴んだ。

よし、決まりだ。

博多明太子を種にしたおにぎりと、ボイルした荒挽きソーセージ、そして甘めの玉子焼き。完璧だ。

早速調理に取り掛かる。鍋いっぱい水をはり、火にかける。同じくフライパンも火にかける。適度な大きさのポウルに卵を三つわり、かき混ぜる。味のある黄身と味のない白身を完全に混ぜてしまつと、卵の味が薄れてしまうので、やや加減をする。

「佐藤さん。一番診察所へどうぞ」

ストッカーから揃いのクリアケースを取り出し、中の白い粉末を卵に投入する。量なんて知らない、勘だ。卵をあともう少しだけかき混ぜて、牛乳を少量加えようとパックの口を開く。

そのあたりで猛烈な違和感に苛まれた。何かがぼくに囁いている、牛乳を加えては駄目だと、もう一度手順を確認してみるんだ、と。ぼくは腕を組み、うんと大きく唸った。

コンロの過熱防止センサーがびびびと甲高い音をたて、フライパンを熱していた火勢が弱まる。

「あー!!」

天啓のように、違和感の正体を閃く。しまった……。なんてことだ……。

ぼくは先ほどふりかけた白い粉末の入ったクリアケースを手に取り、まじまじと見つめる。そして蓋をあけるとおもむろに人差し指を突っ込み、そして舐める。……しよっぱい。

「なんて事だ……。こいつは佐藤さんじゃない！ お塩先生だツツ！！」

それは砂糖ではなく、塩だったのだ。なんてベタな……。

「くっそ！ ストツカーの右が砂糖で左が塩って決まってるだろうが！ 誰だ、位置を変えたやつは！」

全く、何処のどいつだ！ 今週の料理当番はぼくだ！ すまない、ぼく。

ひとしきり自身のだらしなさを呪っていると、今度は鍋が沸騰をはじめた。ああもうひっっちゃかめっちゃかじゃないか。でも、ま。

「これはこれでいいか。しよっぱいは成功の母、と言っし」

口をついた言葉があまりにくだらなくて、ぼくは自分で笑った。

牛乳パックを冷蔵庫にしまいこみ、代わりに野菜室から白だしの瓶を取り出す。醤油と白だしを少々加え、味を整える。今度は間違えないように気をつけて、ストツカーからまたも白い粉末を取り出す。今度は砂糖でも塩でもない、味の素だ。これを入れるとどんなものも、たちまちのうちにジャンキーな味付けに様変わりするといふ魔法の粉だ。

ちやかちやかと更に卵をかき混ぜる。ここまできたら黄身の味もへったくれもねえな、と念入りにかき混ぜておいた。

玉子焼きを焼き始める前に、沸騰した鍋にソーセージを投入する。石川五右衛門も真っ青になるくらい茹で上げてやるぜ！ と意気込んだところで、ぼくがソーセージにしてやれることは特に無い。あ、換気扇を付け忘れるところだった。

「お待たせフライパンちゃん」

バターを少量フライパンに落とす、バターの焦げ始める香ばしい

香りが辺りを漂い、ぼくは生唾を飲み込む。焦げ付かないうちに溶き卵を三分の一程フライパンの手前に流しこむ。じゅわわわわ、とこれまた食欲のそそる音が響き、今度はぼくのお腹が反応を示す。じゅわわわわ、ぎゅるるるる、だ。

卵が半熟位になってきたので、残りも一気に投入する。焦げ付かないように注意を払いつつ、卵を固めていく。頃合いを見計らい、とろとろになった卵をフライパンの向こう側へと集め、フライパンを左手でえぐりこむように動かし、ひっくり返す。少し形が崩れてしまったけれど、ま、いいか。

お皿に盛りつけて、時計を見やる。卵を焼きあげるのに、存外時間がかからなかった。まだソーセージをお湯から上げるには早過ぎる。今のうちにおにぎりの準備をしようかとも考えたけど、ソーセージの食べごろを逃してしまつのもなんだか馬鹿らしい気がして、少し待つてみることにした。

二輪車の甲高い排気音が響く。市営団地のすぐわきの道からだろう、あの道はよく暴走族も走っている。今どき暴走族なんて……、と思うかもしれないが、これが意外といるのだ。突き当たりの交差点には駐在所があった筈だが、取り締まるうとする気配を感じない。この間なんてパトカーの目の前で族車が信号無視をしたのに、特に何もしなかつたくらいだ。信号無視無視。

この様な環境に身を置いているせいか、二輪車に対するぼくのイメージはかなり悪い。乗っている人のからは悪いし、すり抜けなんて見てるだけでひやひやする。何より、あの騒々しさは見ていて滑稽だ。威嚇のようでありながら、同時にあの音で自らの存在を必死に主張しているようにも思える。一言で表すのなら、そう、スマートじゃない。あの乗り物は著しく“品”に欠ける、それがぼくの二輪車に対するイメージだ。

「おお、ソーセージちゃんがいい具合になりました」

とまあ、単車乗りの友人が聞いたら憤死しかねない事は置いといて。今は何よりソーセージだ。二輪車？ ああ、いいんじゃない。

かつこいいと思うよ、うん。

ソーセージを玉子焼きと同じお皿に盛りつける。

次はお待ちかねの、おにぎりだ。

明太子を冷蔵庫から一本だけ取り出す。さすがにこんな時間に一腹も食べるのは、ちと勿体無い。まな板の上に乗せて、薄くスライスする。大きなままだと、一口で具が引き摺り出されてしまう、恐怖の“グガネーノ現象”が引き起こされてしまう。それだけは防がなければならぬので、明太子を八切れにスライスして、引き摺り出された時の被害を最小限にとどめようという試みだ。

炊飯器を開けると、白銀のゆげが中空で渦を巻いた。その向こう側に真っ白なお米を望んだので、思わずぼくは瞳を細める。

「さて、おかずに冷めないうちに握ってしまえますか」

手のひらを水道水で濡らし、しゃもじで白米をよそう。

「あち……あちち」

痺れるような熱さに堪らず腕を動かす。八切れにスライスした明太子のうち四切れを白米で包み、形を整えていく。途中、塩を少々加える。もちろん砂糖らと間違えないように注意をして、だ。

固く握りすぎると口あたりが悪くなるので多少の手加減をして握る。逆に柔らかすぎても、食べているときに崩れてしまう。硬すぎず、柔らかすぎずがポイントだ。

始めは不恰好なそれも、握れば握るほどにそれは綺麗な三角形へと近づいてゆく。不完全な形が徐々に完成へと近づいてゆくというそのさまに、芸術的な雰囲気を感じてしまうのも、きっと夜のせいだろう。

我ながら綺麗に握れたと思う。側面からやや、明太子の色素が覗いているけど、形は悪くない。冷めないうちにもう一つ握る。

「おっと、海苔を忘れちゃならねえな」

海苔をコンロで炙り、巻く。香ばしい海の香りが鼻腔を突く。それでおにぎりをくるめば、完成だ。

面倒くさいから全て一つの大皿に盛りつける。色彩に乏しい皿の傍らに、ケチャップの赤とマスタードの黄が、鮮やかに映えた。

ぼくと夜食と爪楊枝

ソファの脇には小さなチェストが置かれている。具合の良い高さで、ソファに座るとまるでテーブルのように使える事から、かなり重宝している。

「寒いな……」

ぶるる、と身震いをする。半分とはいえ、窓を開け放したまま換気扇をつけたのがいけなかったみたいだ。戸外の冷気が台所の換気扇を指してぼくの部屋を駆け抜けたらしい。チェストの上の空皿を押しつけ、料理の大皿と炭酸水を置くと、ぼくは慌てて窓を閉じた。それでもまだ肌寒かったので、パーカーを一枚羽織った。

ソファに深々と沈み込み、ノートパソコンの電源を入れる。お気に入りのサイトを巡回するためだ。

おにぎりを一つ手に取り、大きくかじりついた。流石にぱりっとはしないが、かといって完全に湿気っているわけでもない、ほかほかご飯に巻いたばかりの海苔特有の歯ごたえ。むしろ、という擬音がまさにぴたりだ。やはりおにぎりは出来立てほかほかに限る。コンビニでも、ホットスナックと一緒ににおにぎりも保温器の中で温めればいいのに、と本気で考えている。どうしてやらないのか不思議でならない。

もう一口、今度は横から喰らいつく。明太子の塩気が口に広がり、次いでぴりりとした刺激が舌をつつく。やはり海の幸同士、海苔との相性は抜群だ。ぷちぷちとした明太子の食感と、それと似通ってはいるもののまた趣の違う白米の食感が混ざり合い、実に面白い。スライス作戦が功を奏して、具が一口でなくなってしまうこともなかった。

「明太子うめえ」

思わず口元がほころぶ。これは明日の朝食が楽しみだ。

箸を掴み、ボイルソーセージを口へと運ぶ。ぱつぱつに張った皮をかみ切ると、ぱきん、と小気味良い感触が顎を伝い、そして旨みたっぷりの肉汁が口内を焼いた。

「あつち！ 熱！ え、これ熱いよ！」

一人喚くも、その口元には笑みが浮かんでいる。そりゃあ、旨い物を食べているのに笑顔じゃないなんて嘘だ。そいつはきっと、舌が無いか、人間じゃ無いか、だ。

ケチャップとマスタードでソーセージを彩り、一口に放り込む。ケチャップの爽やかな酸味が、圧倒的なまでに口に広がる。肉汁と混ざり合い、やや角の出てきたその味わいを、次いで広がるマスタードの香味が丸く収める。さすが、黄金トリオだ。三人寄れば文殊の知恵、とは良くいったものだな。

後ろ髪をひかれながらも、ソーセージの余韻を炭酸水で流す。なぜなら、そうすることで炭酸水の旨さが際だつからだ。

「つかー！ この一杯の為に生きているんだ！」

ひよいひよいとソーセージを口に運び、そして炭酸で喉を洗う。しつこさが染み付いてきたところで、箸休めに玉子焼きへと箸を伸ばす。

「……そうだ、しょっぱくしたんだつた」

口にした玉子焼きもまたしょっぱく、ぼくは眉をひそめる。やっぱり砂糖と塩を間違えたのは失敗だったかもしれない。とはいえ味自体は悪くない。だしの鋭い切れ味を卵のやさしさが鈍らせ、しかし旨みだけを上手に引き立てている。

ノートパソコンの操作も忘れ、おにぎりを片手に、ぼくは忙しなく箸と顎を動かす。ソーセージの音を楽しみ、明太子の食感を楽しむ。炭酸水と玉子焼きで箸を休めるのもつかの間、また箸を動かす。

この時間に満腹まで食べてしまうのは、カロリーを気にしていないばかりでも若干の後ろめたさを禁じえない。先ほどの運動でこの一食が帳消しになることを祈ろう。そう考えると、先刻のぼくはなかなか先に先見の明があったのかもしれないな。

武士は食わねど高楊枝、という言葉がある。

どんなに空腹だろうと、他人に弱みは見せまいと、あたかもたらふく飯を食ったかのように楊枝を使う。武士とはそうあるべきなのだという意味の、彼らの誇りの詰まった高尚なお言葉である。

「いや、食った食った」

げっぷ混じりに一人呟くぼくの口元には、一本の爪楊枝。

やっぱり、とぼくは思う。

「満腹で使う爪楊枝の方が、気分いいだろうな」

誇りも良いけどね。それに、この方が爪楊枝だって幸せなはずなのだ。

ぼくは深く息を吐いた。

ぼくと夜食と爪楊枝（後書き）

このような乱文に目を透して頂き、ありがとうございます。
友人が書いたグルメ小説に触発され、勢いで書きました、反省は少
し……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8210t/>

ぼくと夜食と爪楊枝と

2011年6月4日20時55分発行